

# 「信仰宣言」

## のカテケーシス

(I) 「天地の創造主、全能の、  
神である父を信じる」

竹山 昭

わたしたちが毎日曜日ミサの中で唱える信仰宣言は、  
(多くの場合)洗礼のときの信仰宣言です。信仰宣言の意  
味を学び深めることは洗礼志願者・受洗者双方にとって  
等しく大切なことです。「福音宣教」誌発刊に際し、竹山  
師に特別にお願いして、この信仰宣言の解説を連載してい  
ただくことにいたしました。どうかご期待ください。

(編集部)

これから六回にわたる予定で洗礼志願者を主な対象とし  
て「<sup>クレド</sup>信仰宣言」の内容を取りあげてみたい。「信仰宣言」は、  
少なくとも西方教会では、元来洗礼志願者が洗礼を受ける  
おりの信仰告白定式であった。すでに四世紀には洗礼の準  
備講話が「信仰宣言」の内容に沿って行われていたことも  
知られている。

洗礼志願期を終えて受洗するにあたり、現行の洗礼式で  
も志願者は同じく「信仰宣言」をもって自分の信仰を告白  
する。信者になつてからも、主日毎にミサの中で洗礼の際  
の約束の更新として、また聖書朗読と説教によつて告げら  
れる神のこゝばに対する応答として、「信仰宣言」の定式を  
もつて信仰を告白する。

だれに向かつて、どんなことを告白することになるのか、  
そうすることの意味は何かなどについて説明を受けるとす  
れば、洗礼志願期の間にこそふさわしかろう。

以下では、洗礼の際の信仰宣言の定式に沿うことにす  
る。現在までいくつもの信仰宣言文が知られており、現在  
カトリック教会の典礼で用いることができるものは洗礼の  
際の信仰宣言文以外に二つあるが、先の目的からいっても  
本稿には洗礼の際の定式がふさわしかろう。歴史的にみても  
も、洗礼の際の信仰宣言定式が他のものものになつても  
いる。

むしろ、詳細な説明も逐語的な解説も本稿の目的ではな

いし、それだけの紙幅もない。以下では、信仰宣言の基本的な構造と意義から始めて、主要な内容をときほぐすことで、先述の目的に役立つならそれでよしとしたい。

まず「信仰宣言」の全文を掲げておこう。

「天地の創造主、全能の、神である父を信じます。

父のひとり子、おとめマリアから生まれ、苦しみを受けて葬られ、死者のうちから復活して、父の右におられる主イエズス・キリストを信じます。

聖霊を信じ、

聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からの復活、永遠のいのちを信じます。」

## 一、「信仰宣言」の基本構造と意義

内容に立ち入る前に、簡単にでも「信仰宣言」の定式がもつ基本構造と、このような定式による信仰告白がわたしたちにとってもつ根本的な意味にふれておきたい。

### 《基本構造》

先に掲げた信仰宣言の全文を注意して読むとすぐ気づくことだが、信仰宣言は基本的に三つの項目から成っていることがわかる。父なる神への信仰告白、子である主イエズ

ス・キリストへの信仰告白、そして聖霊への信仰告白である。現在の形では、四つ目の項目と受け取られるような五つの内容が加わっているが、これは信仰宣言が三項目の定式から次第に発展して、第三の聖霊への信仰告白の後に付加されたものである。といっても、すでにこのように付加された形が少なくとも四世紀には認められるので、かなり早くからこの形で定着したものだといえよう。

現在の形の元になったのはローマ教会で、三世紀初頭に実際に洗礼に用いられていたものだといわれているが、その第三項は「聖なる教会の中で聖霊を信じますか」となっている。他の付加はない（ヒッポリトス、『使徒伝承』。質問の形で、父なる神への信仰が問われて、受洗者が「信じます」と応えると水に浸され、ついでイエズス・キリストについて問われて応えると二度目に浸され、聖霊について同様のことが行われる形で洗礼がさづけられていたことが三項式の信仰宣言になった直接の理由である。

しかし、すでにマタイ28・19に「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」とあるように、新約聖書の時代から、人は父なる神と子であり主であるイエズス・キリストと聖霊への信仰告白をして洗礼を授けられ、父と子と聖霊の交わりとしての神のいのちにあずかる、と信じられていたことがわかる。

元来、こうした信仰は教会において伝えられ、教会を通

してもたらされるところから、教会への信仰告白もやがて加えられたのである。

信仰宣言は、こうして、古くから父と子と聖霊への信仰告白という基本構造をもっている。

### 《わたしたちにとつての意義》

では、現代のわたしたちにとつてこの「信仰宣言」のもつ意味はどこにあるだろうか。

(1) まず信仰宣言はわたしの信仰の表明を行うこと、つまり信仰の行為を行うのだということである。信仰は決して抽象的な理論を信じることではないし、真理の認識にとどまるのではない。まして主観的な敬虔の表明でもない。イエズス・キリストによって教えられ実現され約束された具体的なことがらをとおして、そこに父と子と聖霊ご自身がさし出されている。その神を信じて、これに自分自身をうちまかせる行為である。

「信仰宣言」のラテン語文はこのことをよく示している。各項は「Credo in」、*「わたしはを信じる」*で始まり、その直接補語として父なる神、主イエズス・キリスト、聖霊が置かれている。

(2) 信仰宣言の定式は、イエズス・キリストの項にその生涯の主要なできごとのいくつかを伴っている。「信仰宣言」は、「宗教感情の表現ではなく、むしろ一つの出来事に

ついての報知なのである。教会は己れ自身の敬虔に基づいているのではなく、神がわれわれのためになして下さったこと、また、今もなすつづけておられること、の上に基づいている」(W・フォン・レーヴェニヒ)ことを告白することになる。旧約聖書にみるイスラエルの民の信仰告白が、民の歴史の中で神の救いの働きを次々に並べているように(申命記26・5-9他)、新約の信仰告白はイエズス・キリストにおいて行われたできごとを語り、それによって今も実現し、将来明らかとなることから(第三項への付加)を語ることをとおして信仰を告白する。「信仰宣言」の「客観性」と表現されているものである。

(3) さらに「信仰宣言」はひとりひとりの信仰告白のみにとどまらず、教会とともにする信仰告白(共同体的な信仰)でもある。

父なる神がイエズス・キリストにおいて証されたことは歴史の流れをとおして、イエズス・キリストを信じる人々の共同体、つまり教会によって伝えられてきたし、伝えられている。したがって、この共同体に属する人々とともに信じ、告白することになる。

「使徒信経」と呼ばれる信仰宣言の定式は、洗礼の際のそれよりも発展した形をもつが、四世紀から使徒たちの作と言われていた。今は使徒たちの作ということは否定されている。しかし、このことから推測されるように、「信仰

宣言」の基本内容は根本的に使徒たちの宣教にさかのぼり、さらにイエズス・キリストに至るといえる。

「信仰宣言」は幾千年もの年月をこえて歴史的源泉にわたしたちを結びつけ、国と場所を越えて世界中のキリスト者の共同体に結びつけるのである。そこには、カトリック教会だけではなく、さらに同じ主イエズス・キリストと父なる神と聖霊に同じ基本的信仰告白をするすべてのキリスト者との結びつきもある。

## 二、天地の創造主、全能の、神である父を信じます

「信仰宣言」の定式自体も徐々に発展したが、第一項の様式も一世紀の間に徐々に形成された。その順序をたどれば次のようだという。

「父である神を信じます」

「全能の、父である神を信じます」

「天地の創造主、全能の、神である父を信じます」

したがって、歴史的にも、内容からみても、第一項での中心は「父である神」への信仰告白にある。

だが、簡単にでも、「天地の創造主」ということにふれておこう。

### 《天地の創造主》

神を天地の創造主として告白することは、なによりもまず、わたしは究極的には神以外のみなもとをもたない、わたしの存在はほかのみなもとをもっていない、という信仰を告白している。

パウロは聖書の伝統に従って、「無から有を呼び出される神」と書くが、この同じ信仰が「死人を生かす神」への希望の源となる（ローマ4・17）。「自分が死すべきものであることを知っていても、恐れをいだかず、新しい創造を待ち望むよう希望させている」（ワルケンホースト）のである。

わたしだけではない。「天と地」という表現は、旧約聖書が「全世界」、現代ならさしずめ「全宇宙」とでもいうべき表現を知らなかったときにそれに代わるものとして用いたといわれている。したがって、「天地の創造主」と告白することは、わたし以外の人々、さらに存在するものすべてが神以外のみなもとをもたないこと、究極的には神から出たことを告白している。

こうして、天地の創造主への信仰告白は、科学と技術文明に長けた現代にあって、世界のすべてを人間からのみはかることを拒否し、人間が究極の目的ではないこと、世界の主ではないことを謙虚に認めている。

だが、「天地の創造主」という信仰は決して人間の思索によつて導き出された結論ではない。この信仰告白は旧約聖書中でほとんどの場合、イスラエルの民の救いの経験に基

づく信仰告白と結ばれている。エジプトから民を導き出し、多くの強い民々の中からイスラエルを選び出してくださった主なる神が「天と地の創造主」である、という信仰告白である。

わたしたちもイエズス・キリストによって示された神が「天地の創造主」、「わたしとすべてのもののみなもと」と告白するのである。

### 《父である神》

神を父と呼ぶことは、もはや現代では適當ではないと考える人々もいる。確かに、神を父として表現するのは、旧約聖書でも他の古代社会でも、当時の家父長制社会と関連していることは否めないであろう。現代ではもはやそのような意味での制度も意識もすっかり変化してしまっていることも確かであろう。

しかし「信仰宣言」で、またキリスト教のいづこでもなお「父である神」と告白するのは、決してわたしたち人間の経験に基づいてのことではない。「父である神」を信じるとは、なによりもまず、「イエズス・キリストの神」、「イエズス・キリストが明らかにしてくださった神」を信じるといふ信仰告白を意味している。また、イエズスが旧約聖書に明らかにされた神理解を前提として、同じイスラエルの主を「父なる神」として示した以上、わたしたちはイスラ

エルの民の歴史をとおしてご自分を徐々に明らかにしてきたおかたを信じるのである。決して「父」という名は神の性質を表現するのに人間に都合がよいから選び、社会が変われば不適當だから変える、という類のものではない。

「父なる神」とは神の究極的な名なのである。

現在ではよく知られているように、神を呼ぶときにイエズスが用いた独自の表現は「アバ」であった。元来は当時の日常語（アラマイ語）で幼児が自分の父親に呼びかけるときの言葉であったが、イエズスの時代には成長した子らも用いていたという。しかし、基本的にやはりこの語は子どもが自分の父親に呼びかけるための言葉であることに変わりはない。「ユダヤ教の中には神に対してアバという呼びかけがなされたという証拠がただの一つも見つからない」（J・エレミアス）のもうなずける。むしろギリシア世界にもその例は知られていない。アバは「子供の言葉、日常語であり、親しい仲での敬語なのである。イエズスの同時代人の感覚から言って、こういう日常身近な言葉を使って神に語りかけるなどは不謹慎きわまること、否考えることさえできないことであつたらう」（エレミアス）。

しかしイエズスはまさにこのアバを用いて神に祈り、弟子たちにもそうしてよいものとされていることを語っている（マタイ6・7-13「主の祈り」他）。神は「父よ」（アバ）と呼べるおかたであるというイエズスの告知、イエズス・キリ

ストによつてわたしたちもそう呼べるものとされるということ、それはイエズスが告げた福音の中核であつた。

たしかにキリスト者も神が天地の創造主であり、生と死を司るおかたであり、すべてをご存知であるおかたとして信じ、畏敬と慎み、礼拝と賛美を決しておろそかにしない。

「畏敬と慎みは、福音の領域においても人の神に対する根本的態度に属する」(エレミアス)し、福音の本質である。しかし福音の「中心」ではない。福音の中心は、天地の創造主であり、審き主であり、……である同じおかたがわたしたちにとつても「父であるおかた」なのだとの現実にこそある。

イエズス・キリストはそのことばとわざ、その愛のすべてが「父の発意による、父の愛のあらわれ」であると言う。神を父と呼ぶとき、この父こそ救いの計画の源にあるおかたであり、その終極であるおかた(1コリント15・28)であることを告白することになる。

### 《父の子らであることの告白》

こうした信仰告白は、したがつて、「父なる神の子ら」とされた喜びと信頼の告白をも、少なくとも内容的に、含むことになる。神を父として告白することは、自分がその父のまなざしのもとに生きる者であることを告白しないではできないことだからである。

神の子らであるとの恵みは弟子の全生活を貫くというエレミアスに倣つて次のことを述べておこう。

父の子らであることを告白することは「未来の救いにあずかることが確実となる」希望を告白することでもある。小さい者のただの一人も失われなことが神の父としての望みである(マタイ18・10)ことを知っているからである。

それはまた、日々の生活がみ手の中におかれてある安らぎと保護への、子としての信頼の告白でもある。わずか銅貨一枚にしかな値しない一羽の小鳥も父の配慮の中にある(マタイ10・29以下)ことを信じるからである。

したがつて、日々己を量り知れない神の意志に託して生きる勇気を告白することでもある。死の恐れのうちにあつても、死すらみ手の中にしつかり握っているおかた(マタイ10・29以下、マルコ12・27)のまなざしのもとにあることを信じるからである。

イエズスは何事も父なしに起こることはないと確信し、そのおかたこそ神であると告げ、証した。「父である神」への信仰告白は、そのイエズス・キリストの神を信じます、という信仰告白なのである。

(たけやま・あきら 鹿児島教区司祭)